

日曜 interview  
インタビュー

今年5月、中小企業の経営者を対象に新しいビジネスの種を探すことを目的とした異業種交流団体「啄塾」を設立し、塾頭に就いた。塾名の「啄」は卵からかえろうとするひなを手助けする親鳥の様子を示す俚語の「啖啄」から一字を取ったとつた。名前の真意を聞くと、明快な答えが返ってきた。

「卵が新しい商売で、親鳥がわれわれです。アイデアを出し合って議論すれば気持ちも前向きになるし、本業にもプラスになる。新たなネタを

考えた人は多いはずですが」

昨年秋以降の不況。自身の感覚では9割の会社の経営は下降線をたどっているように思える。新団体の設立は、ビジネスの種を探す議論を通じて中小企業の経営者にもっと元気になってもらい、雇用の確保につなげたいという狙いを込めた。

「人間は働くことが人生です。若い人が喜んで働ける職場を提供することが経営者の責任です。本業がどこも心からやりたい今こそ、面白い仕事を

たくじゆく

異業種交流団体「啄塾」を設立

塾頭 高見 貞徳氏



たかみ・さだのり 1960年雄峰高卒。大阪、富山の鉄工勤務などを経て76年に富山検査を設立、2004年から会長。今年5月に「啄塾」を設立、塾頭に就いた。68歳。

雇用は経営者の責任  
発想を鍛える道場に

ビジネスの種探し支援

若者に提供する力が必要なんですよ」

会員の職種は鉄工所経営者や配管業者、水着専門の繊維業者などばらばら。10年ほど前に立ち上げた職場から新商品を生み出すための異業種交流団体「文殊の会」と今年4月に設立したNPO法人「富山湾を愛する会」のメンバーらに声を掛け、22社の経営者が集まった。

許可あれば事業化

「飛行船で木材運搬」「携帯電話を使ったタイエット作戦支援」「遊休倉庫を使った水耕栽培」など、設立から2カ月で既に十数個の提案が寄せられた。会員はメールで情報を共有化して、さらに会議で練り上げ、発案者の許可が得られれば事業化も認める方針である。

「実現性をさらに議論して問題点は掘り下げればいい。他社のためにアイデアを出すのではなく、社長さんの考える力を積極的に鍛える道場にしたのです」

若いころは転職も経験し、苦勞を重ねてきた。試行錯誤を経て35歳で富山検査を設立し、エックス線や磁気共鳴画像装置(MRI)などを駆使してビルや橋りょう、鉄道などの構造物の劣化などを調べ「非破壊検査」と呼ばれる

「初年度の今年は藻から出る水素を分離して取り出す実験に取り組んでいます。これも壮大なビジネスになるかもしれない」

14年前に四国霊場88カ所巡りを始めた。1回約1200キロを歩く行程だが、現在は6回目に取り組んでいる。思えば、長年にわたって四国の海を眺めながら富山湾の活用を考え、新たな産業を生み出したいという思いが「啄塾」を生み出した。

日本の企業の98%は中小企業、働く人の職場は7割が中小企業とされる。新たな異業種交流団体には富山の中小企業に元気を生み出すとする信念がある。

富山湾の活用も

理事長を務める「富山湾を愛する会」にも思い入れがある。自然に恵まれた富山湾の海洋資源を観光やビジネスにもっと活用すべきだとの思いが強い。今年9月に藻の植栽に取り組み、将来的には子どもたちに「富山湾学」を教えるキャンペーンや「富山湾面白館」の建設も視野に入れている。

「わくわく」ことを言いつけど、うちの会社は20年先まで盤石です。わたしの経験上、付加価値の高い仕事で競争相手が少ないことはビジネスの重要なポイントになる」

(松田純)